



朱に交われど

永田円了

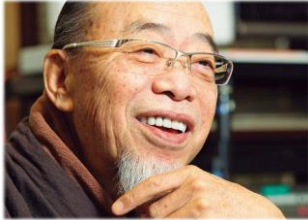
In the world but not of the world

「朱に交われれば赤くなる」という、中国の古いことわざである。「人は交流する人や環境によって支配される」。また「よい友達をもつことは大切である」という意味を説いた言葉である。良きも悪きも「自分が接する人や、身を置く集団は重要」という例えでもある。

人は置かれた環境によって人生が支配されるのか。一理ある。しかし人間は果たしてパブロフの犬であろうか。そうではないだろう。私たちは、ベルの音に対して無条件にヨダレを出すとは思えない。人間は外からの刺激に対し、その反応を選択できる内的な能力が備わっていると思うからである。

英語で、“You made me angry.”（あなたが私を怒らせた）という表現を彼らはよく使う。しかしこの表現は正確ではない。正しくは、「あなたの不愉快な言動を受けて、私自身の感情が怒りを」選択した“のである。他者の言動を正面から受け止め、しかし、その反応は自らが選び取る。つまり、自分の人生の主人公はどんな場合も自分自身であるという認識である。

「何人も私の許可なくして、私を傷つけることはできない」。エレノア・ルーズベルトのコトバが見事にこのことを物語っている。



「朱に交われれば赤くなる」、ただし、それは本人自らが朱になろうと選択した時にのみ赤くなる、ということを実感しなければならない。どのような環境のもとにあろうとも、どんな劣悪な状況にあろうとも、それでも人生に「イエス」と言える選択権を私たちはいつも持っている。あの清廉な蓮の花がドロ沼から育つように。

小椋佳（77歳）、大学卒業後、日本勧業銀行（現みずほ銀行）に入行。銀行員として多忙を極める中、「シクラメンのかほり」「俺たちの旅」「愛燦燦」など、多くのヒット曲を世に出した。銀行という企業集団にありながら、自らを表現する創作活動をやめなかった。

1991年東京浜松支店長に就任（当時47歳）、仕事とプライベートの両立を、次のように部下に説いた。

「自ら恥じない仕事ぶり、自ら悔いない暮らしぶり」。仕事を大事にすることは言うまでもないが、これからは、生きて行くこと、よりも、生きていること、を考える時代になった、と力説し、自らもその哲学に徹した。

企業という「朱」に交われど、自分は自分でいる（赤くならない）という道を辿ったのである。



君子は「和して同ぜず」、小人は「同じて和せず」 — 論語（孔子）の一説である。人格者は人と協調するが、人に媚びたり流されたりはしない。一方つまらない人間は、人に媚びたりするが、人と和することは無い、という意味。権力と対峙して媚びず流されず、正義の戦いに挑戦し続けた立花隆。重い“病氣”になっても“病人”にはならなかった正岡子規の事例も含め、「朱に交われど」を検証する。

<事例 DVD>

小椋佳 77歳、銀行員という集団の中で、自分を貫く
 正岡子規 享年35歳 病氣になっても、病人にならなかった
 立花隆 享年80歳 ジャーナリストを超えるエネルギーと視点
 樹木希林/私、役者やるために人間やってるんじゃない
 平野啓一郎/素の自分・分人の発想
 作家・辺見庸/人間を生きていない現代人（地下鉄サリンより）
 歌・小椋佳/美しい暮らし ♪ 胸に留まる少年を裏切らず♪

円了のホームページ：www.enryo.jp



立花 隆